
カンピオーネ！ 星の守護者

伝説のトドグラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンピオーネ！ 星の守護者

【Nコード】

N6535S

【作者名】

伝説のトドグラ

【あらすじ】

カンピオーネの原作崩壊オリ主チートさらにハーレムです。

プロローグ的な？

この物語は普通に暮らしていた、普通の男の子が、カンピオーネの世界に転生する物語なのです。

主人公は長谷川コウキ。とある事件に巻き込まれて、一度死を迎える。しかし、天使がギリギリの所で魂を引っ張り上げてくれた。

そんなこんなで、物語は始まっていく……

俺は長谷川コウキ。中学3年生で、野球部だ。まあ上手か下手かって言われたら、普通だぜ？あと、顔も普通。性格は、微ロリコンで、MとSを使い分けできる。それと、女好き。友達は男の子しかいない悲しみに俺は耐えて行けるのか？？まったく不安でしょうがない。妹に手をだしちゃいそうになっちまうぞ。

安心してくれ。俺はいたって健全な中学生だから。

作者は完全初心者なので、間違いは指摘してください。

方針ですが、一日、二話書きたいと思ってます。どうぞよろしくお願ひします。

設定（最強かもしれない）（前書き）

6／2 編集

設定（最強かもしれない）

主人公…長谷川 コウキ

性格…ロリコン 女好き ラノベ好き MとS クール
誕生日…7／12 血液型…A 年齢…14 職業…中学生
部活…野球部

強さ（E↘EX） （開始時）

筋力…B 体力…A 俊敏…B 耐久…A 知力…A
幸運…A
スキル…天性のカン

強さ（E↘EX） （覚醒後）

筋力…B 体力…S 俊敏…EX 耐久…S 知力…A
幸運…A
スキル…天性のカン 反射神経など神 風を操作

強さ（E↘EX） （転生後）

筋力…S 体力…EX 俊敏…EX 耐久…EX 知力…
S 幸運…A
スキル…天性のカン 反射神経など神 風を操作 権能

スキル説明

天性のカン

これはいいでしょ？

反射神経など神
スキル名じゃないです。反射神経と運動神経とかがヤバイ位すごい
って事。

風の操作

周囲10kmの風を全て操れる。空飛んだり。

権能（冥界の王）

コウキが転生後にハデスを倒し、得た権能。主に、

・ケルベロス召喚 ・悪魔を操れる ・一年に1人、生き返さ
せる事ができる

設定（最強かもしれない）（後書き）

この他、チートを入れようと思っています。

第一話 コウキの日々(前書き)

序章開始です。

第一話 コウキの日々

俺は一体何のために生まれてきたんだ？本当に神なんているのかな？ああもう生きるのめんどい。いつそのこと外国に泳いで行こうか。途中で不可抗力で溺死できるだろうし。

そんな事を考えながら、俺はテクテクと学校までの道のりを行く。今は夏真っ盛りの8月。そして今日は研修旅行にオーストラリアに行く日だ。

「大丈夫かな？」

外国に行くのは久しぶりだから、少々不安になる。

「まあどうにかなるだろ」

そんな事を考えながら歩いていると、黒い服の滅茶苦茶可愛い金髪の外人さんがいた。くそっ、あんな可愛い子を彼女にしてみたいな。と、妄想に浸っていると、

「あなた、力を欲しくない？」

「??? まあくれるなら。」

やっべえ話しかけられたーとか思ってたら、いきなり不思議発言きたので、思わず軽くなえしてしまった。

「そう。なら、がんばって。」

とか言って、どっか行ってしまった。もしかして…なんかのフラグでは???とか思いつつ歩いていたら、学校に着いた。こっからバスで空港だ。

「まあがんばるわ。」
いない相手に向かってさっきの返答をした。

一日後…

「ここがオーストラリアか。なんか賑やかだな。」

長谷川コウキは知らなかった。すでに己の物語は始まっているのだと…

第一話 コウキの日々（後書き）

友達は出さない事にしました。

オーストラリアの旅

ここに来て3日目。ホームステイが始まる。

(英語は翻訳してあります。)

「いらっしゃい。今日から18日間よろしくね。」

「はい。よろしく願います。」

「あら、礼儀正しい子だね。」

そう言って出迎えてくれたのは、ホストファミリーのシェリーさん。3人家族で、俺と同じ年の女の子がいる。今は学校に行っていないらしい。

しかし英語で話すのは大変だなく。まあどうにかして生きていかな

いと。

半日が過ぎ、娘さんが帰ってきた。

「初めまして。長谷川コウキです。」

「うん。こちらこそ。ニコッ(^^)」

はいやバイ。滅茶苦茶可愛かったですね。しかも、彼氏はいないそうです。よっしゃー！ラッキー！きて良かった。あ、ちなみに名前はユキだそうです。お父さんは日本人だってさ。

夜は興奮で寝られなかったぜ！ついついあの娘の事を考えてしまう俺だった。

寝不足の俺は、眠りながら朝食を食べていた。

「コウキ君、可愛いね。」

ユキちゃんに褒められた!! 勢いで目が覚めて、

「ユキちゃんの方こそ可愛いよ♪」 「……………え？」

しまった! ついつい本音が! しかもユキちゃん顔赤いよ? いきなりフラグ立っちゃった? ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ! 某遠山の金さんの力が!

「ユキちゃん学校一緒だったよね? だったら、ユキちゃんの隣の席で授業受けたいな。ダメかな?」

いきなり積極的な人って引かれるかな? でも本音を言っただけ!

「いいよ♪♪一緒に受けよう☆」

「本当に!? やったー!」

ギターフラグギター! これでユキちゃんは俺のものだぜ? 手出しはさせん! 日本にどうやってお持ち帰りしようかな? ここは家を出て二人で暮らそうかな?

とかニコニコしながらシェリーさんの方を見ると、

「あらあら〜ラブラブね〜♪二人ともがんばって子供作ってね☆」

……………はい? 子供? なんか話が飛躍したー!! とか
いって朝からさわがしかったのであった。

しかし、コウキは知らなかった。それが最後の団欒だという事を。

二人で腕を組んで歩いていると、前の方から、人がいっぱい走ってきた。

「もう人生終わりよー!」 「助けてくれー!」 「なんなんだあいつは!?!」

なんかが居るらしいな。しかも、走ってくる人の中には、血を浴びて、血まみれの人も少なくなかった。これはヤバイな！もしもの時は、ユキだけでも逃がそう。決心した俺は、ユキを連れて血が乱舞する場所に向かった。途中でハンドガンが落ちていたので、拾っておいた。この際だから仕方ないよな？

たどり着くと、そこには1人の男がいた。そしてその周りには殺された人々と、血の海が。吐き気が襲ってくる。隣ではユキがすでに吐いていた。

男は右手に刀、左手にデザートイーグルを持っていた。

「!!!! ユキ！逃げろ！」

しかし、ユキの体はガクガク震えて、動かない。ちっ、守りながら戦うのは無理だ。一気に片をつけないと。男はすでにこちらに銃を向けている。そして、

「死ねえ！」「くっ！」BANG!!!!

俺は勘と動体視力を頼りによけた。しかし、弾は肩に直撃。

「っ????」

今まで味わった事のない痛みが意識を朦朧とさせる。だが、必死に意識を繋ぎとめる！だが、

BANG!.....ドサッ。

男の二発目は俺ではなく、ユキの頭を貫いた：

オーストラリアの旅（後書き）

次は覚醒篇です。

終わり、そして、始まり（前書き）

何か毎回題名無視してますけど、気にしないでください。
今回はやっとコウキ覚醒篇と、あの人に会います。

終わり、そして、始まり

「ユ~~~~キ~~~~!!!!」

ユキが死んだ。あんなに可愛かった顔は、血ですごい事になっている。そして、悲しみに満ちた顔をしていた。

守れなかった。俺は好きな人を守れなかった。どうして!? 俺はチカラが無かった? 人の人生ってこんなに早く一瞬で終わっちゃうのか。だけど、俺は生きてる。だったら、ユキの仇を打ってやる!! ！そう思った時、

（あなたは力を必要としているのね。なら、力をあげる。この力、あなたはどう使うのかしら。）

頭の中に聞き覚えのある声が聞こえる。それと同時に力が体に溢れた。（この力で奴を!!）

「うおお~~~~~!!!!」

叫ぶと同時に、風が身に纏わりつく。

「?? なんだ??! チツ!! 死ねえ!」 「甘い!!」 BANG!!
!!

（弾が見える! これなら殺れるぞ!!）そして、弾を全て避ける! 「風よ!! 今ここにいる敵を殲滅せよ!」

見えない風が放たれる! 一瞬で男は切り刻まれる。血が吹き出る。

「ユキ。仇はとったぜ。安らかに眠ってくれ。」

風で傷を塞ぎ、シェリーさんの所に送る。しかし、

「はっはっは。中々の強さだな、人間。」「っ!!? 誰だ?」

さっきまで男の死体があった場所には、一体の悪魔としか言いようがないような化け物が佇んでいた。

「我は偉大なる悪魔王。サタンだ。人間に名乗ったのは始めてなのでな。誇りに思うがよいぞ。」

俺は、勝てない事を直感した。しかも、体は金縛りにあった様に動かない。

(俺は死ぬんだな……まあ心残りは女の子とイチャイチャ出来なかった事ぐらいかな。風を操るっていう事も体験できたし、まあいいか。)

「全くもって余裕そうだな?」「イヤイヤ!? 足とかガクガクしてますから?」「まあ良い。中々面白かったからな。痛みを感じる暇もなく、冥界に送ってやろうぞ。」「……………」「覚悟はできた様だな。なら、死ぬが良い。」

その言葉が終わると同時に、俺の意識は消えた。

「……………て……………き……………て……………起きて!」「ギャフン!」

何か叩き起こされた。ていうかここどこ? 俺死んだんだよね? ということは、冥界? ああ、このひと悪魔なのか。なるほど、それなら

納得納得♪

「私の何処が悪魔なのかしらね？全く恩知らずなんだから。」
「え？って事は、女神様？」
「そうよ。私の名はアフロディーテ。貴方は一回死んだ、正確には、貴方の肉体のほうだけど。」
「という事は、貴女が僕の魂を助けてくれたんですか！？」
「ええ、そうよ。でも、その代わりとして、やって欲しい事があるの。」
「何をすればいいんですか？」
「貴方には、『星の守護者』になって貰うわ。」
「なんですか？星の守護者って。」

「具体的には、貴方にある世界を悪い神やら悪魔から救って貰うわ。実は、その世界での神様達は、危機に瀕しているの。だから、貴方に助けに行ってもらうの。ここまではいい？」
「はい。」

「それで、あっちの神様は星を守っていて、その星が壊されたりすると、世界は破滅し、私達の世界にも、悪影響が出てくる。だから、それを防ぐため、『星の守護者』になって貰うの。何か質問はある？」
「どうやって、その：悪魔とかを倒すんですか？」

「安心して。まず、私がさっきあげた、風の操作能力があるでしょ。それをさらに強化してあげる。」

「！！やっぱしあの時の女の人は、貴女でしたか！？」

「ええ。そうよ。あの時から、貴方に目をつけていたんだけど、まさかサタンに出会うとは思わなかったわ。まあ私が目をつけちゃった時点で、貴方の運命は始まっていたのよ。」

「……………そうですか。わかりました。」
「ゴメンね。本当に。でも、目的を果たし、帰って来たら、ご褒美をあげるから。それで許してお願い。」

「わかりました。『星の守護者』になって、世界を救います。」

「ありがとう。じゃあ、儀式を始めるわ。」

「全てをまとめる多いなる意思よ！我々の戦士『星の守護者』とし

て、長谷川コウキを任命したまえ！」

「これで、貴方は『星の守護者』よ。私達の次に神に近い存在だから、神力が使えるし、不老になったわ。でも、不死じゃないから、気をつけて。」

「わかりました。じゃあ、がんばってきます。目的を達成したら、帰って来ますね。」

「ええ。未来は貴方に託されたわ。いってらっしゃい。」
「いってきます。」

そして、長谷川コウキの旅は始まった。

終わり、そして、始まり（後書き）

何か、簡単に死んじやいましたけど、ドンマイですね。
ちなみに、アフロディーテさんはコウキのご先祖様です。

神殺し、誕生（前書き）

更新ストップして、すいません。

神殺し、誕生

気がつくと、空の上だった。

只今、高度2000mを落下中。正直、体がメッチャうずうずするね。というか、ここ何の世界なんだろう。俺の好きなゼロ使の世界かな？あ、でも月二個ないから、違うっぽいな。

落下中……

「お？何か見えて来たぞ？何だあれ？まさか、ピラミッドか！！？やべえ初めて見るわ。でっかいな。さて、そろそろ降りますか。」風を操作して、ゆっくりと着地する。ふう、中々使い勝手のいい能力だな。ん？なんか人がいっぱいやって来たぞ？

「すいませ〜ん！君何でこんな所にいるのかな？ここは今、一般人は立ち入り禁止のはずなんだけど…。もしかして、貴方がハデス！？」

「なんですか。そのハデスって。僕は長谷川コウキって言いますけど。」

「これは失礼。ちょっと焦ってしまったよ。だいたい、君がハデスだったら、今頃僕達はあの世にいるからね。ああ、それと、僕の名前は甘粕冬馬って言います。」

「甘粕冬馬って！もしかして、あの甘粕冬馬！！？」

「あのってなんですか？全く。それに、この辺りは立ち入り禁止です。どうやって入ったんですか？」

さすがに空から落ちてきたとは言えないな。しかも、甘粕って。カンプIONEの世界なのかここは？

だとしたら、かなりラッキーじゃん。エリカとかいるよな。ああ、

一度会ってみたいよ。

「気がついたら、ここにいました。」

「まさか。そんなことあり得るはずがない。だいたい、僕らの人払いをくぐり抜けられるわけが……。まあいいや。とにかく、君を保護者の所まで送り返さないよ。」

「あの、多分家族はいません。それに、困ってる事があるなら、手伝います。」

「そうか。じゃあ僕達で保護しましょう。あと、これは君の手に負える問題じゃないからね。」

「さっきハデスって言ってたけど、もしかして、神様の事？」

「っ？まあいいや。そうだよ。神様というか、悪い神様みたいなものなんだけどね。今、この世界の神様が、悪い神様に襲われているんだよ。そこで、僕達は、良い方の神様の味方になった。で、今僕達は囹になって、ハデスをおびき出しているんだよ。」

「それじゃあやられちゃうんじゃない？」

「だからこそ、少人数なのさ。」

おいおい、いきなり甘粕冬馬の死亡決定かよ。まあいいや。アフロディーテさんにも言われたし、ここは倒しておいた方が良さそうだからね。

「じゃあ、僕がそいつを倒すよ。」

「は？無理に決まってるでしょう。だいたい、ハデスは悪い神様の中でも上位に入る無差別殺人を繰り返す化け物なんだよ。」

「やってみなきゃわかんないよ。」

「だから無理だと：チツ来ちゃいましたね。しょうがない。殺れると思うならやってみなさい。どちらにせよ、僕達は死ぬんですからね。」

よし、じゃあやるか。というか、あれがハデス？なんか、2M越してるよね。しかも、ごっつい鎧着てるし。ハデスって言ったら、冥界の王でしょ？もっと、かっこいいと思ったんだけど…まあいいや。頑張るとしよう。

「じゃあやりますから、離れてください。」

「やるって何を？」 「いいから！行くぞ！風よ生ける刃となりて、敵を切り刻め！！」

ビュンビュン！ビュンビュン！ズバツズバツ！

風が大きな刃となって、敵を切り刻んでいく。ハデスの鎧は跡形もなく消え去った。中には、超絶的なイケメンが入っていた！

「ふふ。たかが人間だと思って防御をしなかったが、まさか『星の守護者』だったとは。油断したよ。君は僕達の主を倒す最後の可能性だからね。まあ、ここで僕が芽を摘んでしまえば問題ないからね。」

「あんたは『星の守護者』の事を知っているのか？」

「僕で無くとも、誰でも知っているさ。ある神の予言に、『世界が混沌の神に覆われる時、星の守護者が現れ、聖なる風を操り世界を救うだろう』と書いてあるんだよ。それが、今始まるうとしている訳だ。この話は有名だからね、みんな知っているのさ。」

「そんなことが…まあ『星の守護者』についての細かい事は全然知らないけどね。とにかく、悪い神様倒して、世界を救えば良いんだろうから、早く終わらせてやるぜ。」

「ふふ、その自信は何処から来るのだろうね。面白い、少し腕試しだ。来い！ケルベロス！」

「がルルルル！がルルルル！」

「さあ、ケルベロスに勝つ事が出来れば僕も相手をしてあげよう。」

「よし、やってやる！いくぜ！風よ巨大なる塊となりて、敵を潰せ！
エアハンマー！」

「ケルベロス！トリプルデスファイアー！」

ズガアアアアン！

二つの攻撃がぶつかり合う。しかし、ケルベロスの放った火は、風に押し負け、爆散する。そして、風はケルベロスに直撃。一瞬で吹っ飛ばされ、力を失った。

「まさか、ケルベロスが一撃でやられるとは！予想以上だ！しょうがない。私の全力を一撃に込め、攻撃するでしょう。くらえ、冥界の裁き！」

「負けるか！俺も全力を掛けよう！風よ、全ての風よ、聖なる風よ。私の敵を浄化したまえ！ホワイトウィング！」

ヒュンツ！

ゴウウツ！

なんと、ハデスの攻撃は、白い風に当たった瞬間消えてしまった！

「何！？浄化の風！！？くそっ、勝てる訳が。グワアアアッ！！！」
「なんかこの力ってスゴいな。でも……」

どサッ。両者たおれた。やがて、ハデスは光の粒子となって、消えて行った。

「長谷川君ッ！長谷川君ッ！大丈夫かい？」

「大丈夫です。脈も大丈夫です。おそらく、あの白い風を使って疲れたんでしょう。」

「しかし、彼が『星の守護者』だったとは。おそらくあの白い風は聖なる浄化の風なんだろう。さらに、ハデスを倒したという事は8人目の神殺し、カンピオーネの誕生か。きっと、彼は草薙さん以上の神殺しになるだろうね。」

こうして、長谷川コウキは神殺しとなった。

神殺し、誕生（後書き）

戦闘は勘弁してください。

ホテルにて（前書き）

いやゝお久しぶりです（＾＾；；

中々思いつかなかったのと、学生なんで更新が全然できません。

ヒロインは、神様にしようと思います。

ホテルにて

目が覚めると、知らない天井が目に入った。

「……ここはどこだ？」

周りを見ると、どうやらどこかのホテルの一室らしい。しかも、自分はかなり大きなベッドの上にいた。

お腹が減ったので、何か食べ物がないか探そうと、ベッドを降りると、ドアが開いた。

「おや、起きましたか。眠りごころはどうでしたか？ここは正史編纂委員会の所有するホテルです。かなり高級なんですよ。」

「いやゝ運んで貰ってすいませんね。ところで、食べ物は何かないですか？」

「ありますよ。ここにパンなどが入ってます。」

「おお。ありがとうございます。」

「食べながらで良いので聞いてくださいね。単刀直入に言うと、あなたは冥王ハデスを倒して、カンピオーネになりました。それで、カンピオーネの長谷川さんの庇護下に正史編纂委員会を置いてもらいたいのですが、よろしいですか？」

「それって、正史編纂委員会が俺の傘下になるって事ですよね。別にいいですよ。」

「本当ですか。ありがとうございます。それと、幾つか長谷川さんに聞きたい事があります。」

「いいですよ。」

「まず、カンピオーネとなった今、冥王ハデスの権能が何かわかりますか？」

自分の頭の中を探ってみる。すると、

「わかりました。まず、地獄の番犬ケルベロスを召喚できますね。それと、魔眼が使えます。死の魔眼ですね。まあ神には効かないみたいですけど。」

「わかりました。ありがとうございます。次に、『星の守護者』について、何か知ってますか？」

「ハデスに聞いた事があるね。」

「そうですね。まあ予言通りなら、これから悪い神様達と戦っていくでしょう。何か困ったことがあったら、正史編纂委員会が助けします。」

「わかりました。」

「あと、彼女さんとかはいらっしゃいますか？」

その言葉を聞いた時、一人の女の子が思い浮かんだ。自分の目の前で死んだ女の子。自分の助けられなかった女の子。自分の無力さに悲しくなる。

「いません。」

「わかりました。これから何処か向かう場所がありますか？特になら、一緒に日本に来ませんか？」

「：日本ですか。俺は住むとことか無いんですけど。」

「！本当ですか！？なら、私達の方でご用意します。」

「感謝します。」

「では、準備が出来次第、向かいましょう。」

少年は自分の生まれた国に戻る：

ホテルにて（後書き）

コウキは、護堂の一つ下です。

帰国？（前書き）

やっと更新出来ました。今月中には結構進むつもりです。

帰国？

日本に帰って来た：しかし、自分のいた日本ではない。自分の親が居ない、という事実は少年に寂しさを与えていた。

飛行機に乗って10時間程で成田空港に着いた。飛行機は最高クラスの個人室だったので、かなり快適に過ごす事ができた。ちなみに俺は、

「そんな、いいですって。」

「いやいや、彼方はカンピオーネであり、我等の王なのですから、それに相応しい部屋にただけですよ。どうぞ、遠慮なさらず。」

何言っても聞いてくれそうになかったから、諦めてその部屋で時を過ごす事にした。正直、寝心地半端ないっす。

空港に着き、荷物を受け取ってロビーに行くと、甘粕さんが

「今から彼方の住む部屋を決めに行きましょうか。此処からの移動は正史編纂委員会の車でいきます。」

「はぁ。わかりました。」

それから10分位すると、黒い車が迎えに来た。それに乗って、東京に向かった。

「彼方は日本のもう1人のカンピオーネの草薙護堂さんを知っていますか？」

「ん？ああ。知ってますよ。確か、欧米の方で、軍神ウルスラグナを倒したとか。」

「ご存知でしたか。その草薙さんは今、東京に住んでいらっしゃるんですよ。」

「へえー。じゃあ、草薙さんと近いところに住もうかな。カンピオーネが二人も居るんだから、神様だって寄ってくるでしょ。その方が、『星の守護者』としての役割も早く終わるだろうし。」

「それはいい考えなんですかね？神様が寄ってくるという事は、日本に危害が及ぶ可能性が高いですよ。」

「そりゃそうですけど。でも、カンピオーネとか神様がいる時点でそれは避けられない運命ですよ。」

「それもそうですね。わかりました。それなら、草薙さんのいらっしゃる高校に転入したらどうですか？その方が、まつろわぬ神が現れた時に対応が早くなりますからね。」

「いや僕中3なんですけど。」

「大丈夫ですよ。ちゃんと中等部がありますから。」

「そっか。それなら大丈夫そうですね。じゃあ、さっさと家を決めて、手続きに行きましょう。」

そして、長谷川コウキはもう一人のカンピオーネと近づく事になった。

帰国？（後書き）

次回は、学校編です。

学校生活の始まり（前書き）

女子生徒とのフラグは作りません！

あと、原作と違うところもありますが、気にしないで読んでください。
お願いします！

学校生活の始まり

家は、家賃7万程のアパートになった。護堂のいる城楠学院には徒歩20分程である。

設備は、寝室、リビング、空き部屋2つ、キッチン、トイレ、風呂。他に家具などは、正史編纂委員会が手配してくれた。

役者への手続きも、甘粕さんと一緒にやった。

また、金がないので、これも正史編纂委員会がだしてくれるそうだなんと、月200万。勿論、家賃などはこの中から払う。と言っても、最低でも120万位は残る。何に使うかは、これから考える事にした。

今、長谷川コウキは家電量販店にいる。此処には、携帯電話と、パソコン、その他もろもろを買いに来た。

「さて、まずは携帯電話を買おうかな。」

こっちの世界に来る前も、携帯電話は持っていて、よく友達と電話やメールをしていたので、ソフトバンクの携帯電話だった。だから、こっちでもソフトバンクにする事にした。

こちらの世界は、元の世界と何も変わらず、神様や魔術師みたいな人が増えただけなので、それと言った不自由は無かった。

一通り買い物を終えたコウキは、家に帰る事にした。明日からは学校が始まるので、早めにご飯を作って寝た。

朝7時、起床したコウキは、顔を洗って、朝食にパンを焼いて食べ

た。

実はコウキは、料理は基本くらいしか出来ない。つまり、頑張ってもカレーぐらいか。この事を必死にどうにかしようと考えていたが、少しづつ覚えていけばいいと思った。

今日は学校に8時20分に、職員室に来てくれと言われていたので、7時40分に家を出た。

コウキの通る通学路は、途中から駅からの道と合流するので、そこからは人通りが一気に増える。

しばらく歩いていると、高校生だろう、黒髪短髪のイケメンと、それに加えて2人の美少女が！！1人は金髪のスタイル抜群で、もう一人は茶髪の大和撫子だった。

（あれが護堂さん一家か。リアルで見ると、かなり凄いな。この距離だから、カンピオーネって事ばれてるかな？とりあえず話しかけてみよう。）

「初めまして。あなたは、草薙護堂さんですよ。あと、両側のお二人はエリカ・ブランデッリさんと、万里谷由理さんですよ。」

「ん？そうだけど、君は誰だ？」

「中等部みたいね。」

「この方が8人目のカンピオーネ様なんですね。」

やっぱばれてたか。それなら話しやすいな。しかも思ったよりリアクション薄い！

「ええっと。僕は長谷川コウキって言います。見て分かる通り、城南学院中等部の3年です。偶成、同胞の草薙さんを見つけたので、顔を知って貰おうと話しかけました。」

「やっと、相談出来そうな奴が来た！これで少しエリカ達から逃げられ…ヒッ！」

「護…どお…う…？」

「……………」

「助けてくれ！コウキ！頼む！こいつ等をどうにかしてくれ！」

俺には出来そうに無かったので、軽くスルー。

「！？…そんな！せっかく助かると思ったのに！…うわわああ！！！」

護堂は学院の方に、美少女2人に連れて…いや、連行されて行った。それと、リア充は敵と認識するコウキであった。

学院に着いて、職員室にきたコウキは担任になる、髪の薄い男性教諭から、色々な説明を受け、自分のクラスとなる、3年5組に案内された。

（ヤベエ。友達できるかな？イジメられたらどうしよう？可愛い子いるかな？部活とか入ろうか？ヤバイヤバイヤバイヤバイ！）

「じゃあ、こんな時期に色々事情があって、転入してきた生徒を紹介する。じゃあ、入ってきて。」

ガラガラ。

ドアを開け、一步一步歩き出す。案の定、教室は静かだ。そして、教卓の前まで行って、挨拶をする。

など、悲しくなってくる様な発言が。だからとりあえず、

「あー。まあよろしく。」

と、適当に答えておいた。その後も、質問攻めにあったが、変な事がばれない様に注意しながら答えた。

昼休みは寄って来た男子達と一緒に学食に向かい、昼飯を食べた。

授業は、元々レベルの高い男子校にいたコウキには、容易く解ける程度の問題だった。

また、心配だった、友達できるかな？なんて考えは、一瞬で消えたので、安心していたコウキだった。

学校生活の始まり（後書き）

コウキは学力、運動、ルックスのどれも良いので、皆から羨ましがれます。

あと、部活は入らず、帰宅部でいきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6535s/>

カンピオーネ！ 星の守護者

2011年6月12日19時02分発行